

5. 京丹後市須田平野古墳の調査（2）

京都府立大学文学部考古学研究室

1. はじめに

京都府立大学文学部考古学研究室では、2020年より京丹後市教育委員会・京丹後市久美浜町須田区などと共同で、京丹後市湯舟坂2号墳およびその周辺に分布する古墳の学術的価値を明らかにするとともに、その成果を地域資源として活用するための様々な取り組みをおこなっている（本書、第I部第6章参照）。とりわけ昨年度より湯舟坂2号墳の至近に位置し、先行する首長墳と目されながらも墳丘形態や築造時期などの評価の定まっていない須田平野古墳の調査に着手しており、今年度は墳丘の発掘調査を実施し、墳形が円墳と判明する等の成果が上がっている（京丹後市教育委員会・京都府立大学文学部考古学研究室2023）。発掘調査の成果については現在整理中であり、本稿では、昨年度に実施した須田平野古墳横穴式石室の実測の成果について報告する。なお石室の実測調査は井川瑞季・守田悠（以上博士前期課程1回生）、藤川聖起・横白彩江（以上学部生）が担当し、2022年9月19-27日を中心に、2023年9月までの間に断続的に実施した（所属はすべて昨年度時点）。合計の作業日数は14日である。（諫早直人）

2. 須田平野古墳の概要

（1）立地と環境

須田平野古墳は、京丹後市久美浜町須田小字東側に所在する。川上谷川左岸側の支流である伯耆谷川右岸に位置し、古墳は徳良山（標高316m）から派生する丘陵（標高75～80m）の先端、麓の農道との比高約30mをはかるところに築かれている。

川上谷川流域では縄文時代以前の遺跡は今のところ確認されていない。弥生時代になると、川上谷川流域の各所に集落が形成され、中でも中期後葉から後期後葉の橋爪遺跡（図1-37。以下、図1を省略）は拠点集落であったと考えられている。墳墓としては、権現山古墳（29）の調査時に後期前葉の木棺墓が検出され、橋爪遺跡東方の丘陵上の茶臼ヶ岳古墳群（38）では後期中葉の台状墓2基が確認されている（京丹後市史編さん委員会編2010、春日2014）。

古墳時代になると、川上谷川流域には多数の古墳が築造されるようになる。前期に属する古墳としては川上谷川右岸側の全長42mの前方後円墳である島茶臼山古墳（40）、川上谷川左岸側の方墳である権現山古墳などが挙げられる。中期の詳細は明らかではないが、川上谷川右岸側に、前方部が削平された前方後円墳と目される芦高神社古墳（43）があり、島茶臼山古墳に続く時期の首長墳と評されている（京丹後市史編さん委員会編2010）。後期になると



1. 須田平野古墳 2. 平野山上古墳 3. かせわ古墳 4. 九十九塚古墳群 5. 紋谷古墳 6. 暮石古墳群 7. オヤケ古墳群 8. 鳥ノ奥古墳群 9. 湯舟坂2号墳 10. 湯舟坂1号墳
11. 北垣古墳群 12. 二枚谷古墳 13. コウ田古墳群 14. 上日冷古墳 15. 下日冷古墳群 16. セイガイ谷古墳群 17. 八坂神社古墳群 18. 下山古墳 19. 湯舟坂遺跡 20. 天王谷古墳群
21. 東ガキ古墳 22. 王の宮山上古墳群 23. 王の宮横穴群 24. コリガ鼻古墳群 25. あぐら谷古墳群 26. 谷ガへ田古墳群 27. 崩谷古墳群 28. アバタ東古墳群 29. 権現山古墳
30. 大宮谷古墳群 31. 東岳古墳 32. 高西谷古墳群 33. 大久保谷古墳群 34. 岡田古墳群 35. 陵神社古墳群 36. 八幡山古墳群 37. 橋爪遺跡 38. 茶臼ヶ岳古墳群 39. 御社山古墳群
40. 鳥茶白山古墳 41. 谷古墳群 42. 八条古墳群 43. 芦高神社古墳 44. 新谷古墳群 45. 狐塚古墳群 46. 愛宕山古墳群 47. だんご山古墳群 48. 柴原古墳群 49. 後ヶ谷古墳群
50. 明神山古墳群 51. 向山古墳群 52. マガリ古墳 53. 青谷古墳群 54. 堂谷古墳群 55. ケンケン山古墳群 56. 城地東古墳 57. 城地古墳群 58. 畑大塚古墳群 59. 平尾古墳
60. ヒジリ古墳群 61. トクジヤ古墳群 62. ラント古墳群 63. 上西谷古墳群 64. 下西谷古墳群 65. 下路古墳

図1 川上谷川流域周辺の遺跡分布図 (S = 1/25000) (ベースマップに国土地理院地図を使用)

再び古墳の築造が活発になり、川上谷川の平野部を囲む丘陵尾根上には多数の古墳が形成される。そのうち須田平野古墳の所在する伯耆谷では、北側丘陵上のセイガイ谷古墳群(16)、南側丘陵上の天王谷古墳群(20)やユリガ鼻古墳群(24)、奥部前方の湯舟坂2号墳(9)を含む湯舟坂古墳群、奥部の暮石古墳群(6)など130基あまりの古墳が確認されている。同時に、谷の南側丘陵頂上にも山上平野古墳(2)、かせわ古墳(3)などの単独墳が築かれている(奥村1983、京丹後市史編さん委員会編2010、春日2014)。

また、伯耆谷川に臨む丘陵縁辺部には、須恵器円面硯・転用硯などが採集された湯舟坂遺跡(19)があり、伯耆谷に古代官衙が所在したとする見解もある(奥村1983、春日2014)。本格的な発掘調査がおこなわれていないため推測の域を出ないが、大坂峠の東に位置する伯耆谷は丹後地域と但馬地域を繋ぐ交通の要衝と考えられ、ここに所在する須田平野古墳をはじめとする多数の古墳は当時におけるこの地域の重要性を反映したものとみることができる(京丹後市史編さん委員会編2010)。

(2) 既往の調査と評価

① 1900年代

須田平野古墳についての最初の本格的な言及は、1920年に刊行された『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊にみられる。当書において、梅原末治氏は「平野ノ古墳」と称し、南西方向に開口する横穴式石室を持つこと、石室は玄室長14尺7寸(約4.45m)、幅7尺5寸(約2.27m)、羨道長18尺2寸(約5.51m)をはかること、花崗岩を用いて梯形に積み重ね、天井部は2つの巨石で構成されていることを述べている。また、床面と右側壁の実測図を掲載した上で(図2-①)、石室形態については「普通此ノ種石室二於イテ見ル所ト何等異ナル所ナキ」と述べるも、「熊野郡ニ於イテハ最モ大ナル古墳ノ一」と評した(梅原1920)。そして、この報告は1923年刊行の『京都府熊野郡誌』にもそのまま引用されている(京都府熊野郡役所1923)。

1968年7月には同志社大学考古学研究会によって須田平野古墳の墳丘測量・石室実測調査がおこなわれた。これは同研究会が1964年頃からおこなっていた、丹後の遺跡の分布調査の一環としてなされたものである(辻川2003、山口2014)。この際作成された実測図は、1988年刊行の『畑大塚古墳群』にて、周辺遺跡として須田平野古墳を紹介する際に初めて掲載された(図2-②)。実測図を付した上で、伯耆谷にみられる総数100基以上の古墳のなかでも、須田平野古墳は最古期の横穴式石室墳であることを述べている(山内1988)。

また、『湯舟坂2号墳』でも、湯舟坂2号墳の周辺遺跡として須田平野古墳が挙げられている。湯舟坂2号墳と同様に巨石を用いた横穴式石室であること、石室がほぼ完存する貴重な古墳であること、石室の寸法などが言及されると同時に、石室形態を「両袖式横穴式石室」と評価している(奥村1983)。

② 2000年代

2000年代の動向として、石室の規模・形態に着目した仔細な検討が多くなることが挙げられる。細川康晴氏は、丹後地域における横穴式石室の導入・展開について論考している。氏によると、須田平野古墳が属する川上谷川水系にはTK10型式古段階併行期に比定される崩谷3号墳があり、これが丹後地域における「畿内型片袖式石室」の初現であるという。その後、

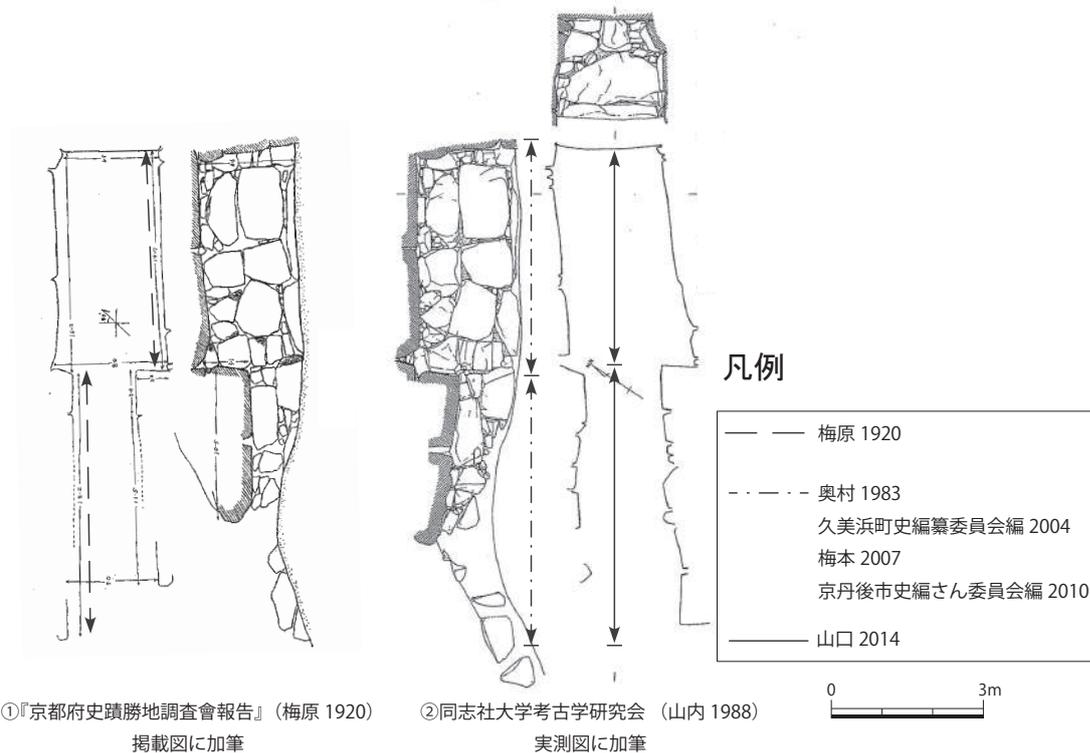


図2 各文献における須田平野古墳の石室規模 (S=1/150)

表1 各文献における須田平野古墳の石室規模・石室形態

文 献	石室規模 (m)			石室形態
	全 長	玄室長	羨道長	
梅原未治 (1920)	—	14尺7寸 (4.45)	18尺2寸 (5.51)	—
奥村清一郎 (1983)	9.78	4.60	5.18	両袖式
細川康晴 (2000)	—	—	—	畿内型両袖式
久美浜町史編纂委員会編 (2004)	9.5	4.60	4.90	両袖傾向の左片袖の畿内型
梅本康広 (2007)	—	4.60	—	丹後の中では最も畿内の石室に近似
京丹後市史編さん委員会 (2010)	9.78	4.60	5.18	両袖式
山口誠司 (2014)	9.80	4.25	5.55	片袖傾向の両袖式

※1尺=0.303m

TK43 型式併行期には須田平野古墳を以て「畿内型両袖式石室」が導入され、以後被葬者の階層に応じて片袖式石室と両袖式石室が使い分けられていると論じた(細川 2000・2006)。

『久美浜町史』では須田平野古墳が「両袖傾向の左片袖の畿内型横穴式石室」を有する円墳で、奥壁構造は宮元香織氏が設定する「畿内型」横穴式石室の d 類⁽¹⁾(宮元 2005)に該当すると指摘された。また、古くから開口していたため副葬品は知られておらず、古墳の正確な築造時期は推定できないとする一方で、石室構造から古墳の築造時期を古墳時代後期後葉に比定できると述べている(久美浜町史編纂委員会 2004)。

梅本康広氏は、『近畿の横穴式石室』にて丹後地域における横穴式石室の特徴について論じた。氏は、古墳ごとに玄室長幅比(玄室長÷玄室幅で算出)を求め、丹後地域の横穴式石室の多くが玄室長幅比 2.5⁽²⁾以上となることを指摘する。TK43～TK209 型式併行期において、畿内では大半の横穴式石室が玄室長幅比 2.0 前後となることを以て、丹後の横穴式石室の特徴

は玄室平面形が細長いことにあると論じている。一方で、須田平野古墳は玄室長幅比が2.3と同時期の畿内大型石室の一般的な規格となることをもとに、当古墳が丹後の古墳の中でも最も畿内の石室に近似すると述べた（梅本2007）。

山口誠司氏は2014年に刊行された『同志社考古』第13号にて、1968年におこなわれた同志社大学考古学研究会による須田平野古墳の石室調査の成果を報告した。報告では「片袖傾向の両袖式横穴式石室」であることや石室規模、石室の特徴や現状などを仔細に述べている。同時に、川上谷川流域は畿内型横穴式石室の受容が早いという細川氏の指摘をもとに（細川2000・2006）、こうした背景には川上谷川流域がいち早く畿内勢力との結びつきを強め、その結果畿内から石室を構築する工人集団が派遣されたか、もしくは技術伝播があったと想定している（山口2014）。

以上、須田平野古墳の研究史を、主に石室について言及しているものを中心に概観した。先行研究上で見られる須田平野古墳の石室規模・石室形態については表1にまとめた。

各文献では石室の寸法に相違がみられるが、これは玄室長・羨道長の求め方が研究者間で異なることに起因する。各文献における玄室部と羨道部の分け方は図2の通りである。平面図をもとに区別するもの（梅原1920、山口2014）、縦断面図をもとに区別するもの（奥村1983、久美浜町史編纂委員会編2004、梅本2007、京丹後市史編さん委員会編2010）に大別できる⁽³⁾。石室形態についても、両袖式（奥村1983、細川2000・2006、京丹後市史編さん委員会編2010）、両袖傾向の左片袖式（久美浜町史編纂委員会編2004）、左片袖傾向の両袖式（山口2014）と、評価が定まっていない。（横白彩江）

3. 横穴式石室の規模と構造

(1) 現状

石室は南西方向に開口しており、主軸は座標北に対し東へ45度程度傾いている。奥壁から現状で天井石が途切れる箇所までの石室の全長（中軸）は7.6m、前庭まで含めると9.1mを測る。羨道は開口部付近に原位置をとどめない石や、土圧によってやや内側に押し出された石、亀裂の入った石も確認することができるものの、玄室は側壁、天井石ともに良好に遺存している。壁体を構成する石材はいずれも花崗岩の自然石である⁽⁴⁾。石室内には周辺から流入した土砂が厚く堆積しており、とりわけ羨道側は土の堆積が厚く、玄室側と最大0.3mの高低差がある。長さ0.6mのピンポールで敷石の有無などを調べたが、明確に確認はできなかった。

(2) 規模・構造

玄室 玄室長は4.4mを測る。幅は奥壁付近の最も狭い箇所でも2.0m、玄門付近の最も広い部分で2.5mを測り、現状の高さは2.0mを測る。右側壁に対し左側壁が玄門部に向かってやや外側に開き、玄室平面形はややいびつな台形を呈する。奥壁・側壁・天井には1.0mを越える大ぶりの石材が用いられる。

玄門 幅1.5m、前壁高は約0.8mを測る。各袖部は玄室側壁より左袖で約0.7m、右袖で約0.3m内側に張り出しており、玄室に対し羨道が右側壁に偏ってとりつく。

羨道 羨道長は3.2m、最大幅2.1mを測る。高さは、現状で1.1mを測る。羨道は玄門付近から前庭に向かって外側に開くハの字状を呈する。

天井 天井石は玄室 2 石、羨道 3 石の計 5 石が用いられている。奥壁から 3 石目の 2 段目は 1 段目の上にあるため規模を確認できていないが、それを除く天井石の規模は奥壁から 1 石目が 1.8m 以上、2 石目は 2.3m、3 石目の 1 段目は 1.4m、4 石目は 1.8m である。各天井石の間に隙間があり、そこには小ぶりの石材を充填している。玄室の天井石は天井高がほぼ水平を保って架構されるが、羨道の天井石は玄門をなす石材が約 5 度、前庭側の石材が約 11 度、開口方向に向けて天井が高くなるように傾斜して架構される。

前庭 現状で天井石が確認されない箇所を前庭とする。前庭長は 1.9 m で、幅は最大で 2.1 m を測る。羨道に続く形でハの字状を呈する。

(3) 石室の構築

石室の石積みを仔細に観察すると、構築時の作業単位と対応するとみられる石材を水平に揃えたラインが認められ、その石材規模にも変化が見てとれる。本稿ではこのような石積みに対する意識が変化するラインを目地とする（図 4・表 2）。以下、便宜上この目地を境界として下から第 1～3 単位とする。

玄室は各壁面、標高 66.8～67.0m の間と、67.6～67.8m の間に目地が通る。奥壁では、第 1 単位の石材は長軸 51.9m 以上の 1 石からなるとみられ、左側壁の第 1 単位・第 2 単位の石とかみ合う。第 2 単位は 1 石を指向するが、右側壁側の隙間に長軸 0.3m 以下の小ぶりの石材を充填する。第 3 単位はやや大振りの石材 2 石を主とし、左側壁側に長軸 0.3m 程度の石材を 3～4 段積み、天井石までの隙間を調整している。第 3 単位の石材は、隅を消すように左側壁と奥壁をつないで架構する。なお、奥壁の天井付近の一部に土砂の流出により石材の有無が判然としない箇所がある。

左側壁の第 1 単位は、長軸 2.0m 以上の石材と長軸 0.5m 以下の小ぶりの石材を配している。第 2 単位は長軸 1.3m 以上、短軸 0.8m 程度の石材を 3 石積み、隙間に長軸 0.4m 程度の石材を充填し、上面のレベルを揃える。第 3 単位は長軸 0.5m 以上のやや大振りの石材を 5 石積む。奥壁側から 1・2 石目は 1 段で積むが、続く 3・4 石目は 2 段に積み上げる。隙間には、長軸 0.1～0.3m の小ぶりの石材を充填し、天井までの高さを調整している。

右側壁は、第 1 単位に左側壁と同様に長軸 2.0m 以上の石材を少なくとも 1 石積むと推測される。第 2 単位は長軸 0.9m⁽⁵⁾ 以上の石材を奥壁側から 3 石積む。続く 4 石目は長軸 0.5m 前後の石を 2 段積み上げ、隙間は 0.1m 大の石材を充填する。奥壁から 4 石目は前壁との境にあたり、斜めに配置して右側壁と前壁をつないでおり、隅消し状になっている。

玄門は長軸 0.9m 前後、高さ 0.6m 以上の石材の上に長軸 0.3 m 前後のやや小ぶりの石材を 1～2 石積んで構成している。右袖側の石材は、平面上で右側壁に対して水平ではなくやや外開きに配置することで隅消しを指向している。

前壁は羨道天井石を兼ねており、袖石の上に端面を揃えて長軸 1.7m 以上、短軸 0.8m の石材を横架し、天井石までの隙間を長軸 0.3m 前後の石材で充填する。前壁高は側壁の第 3 単位とおおむね一致する。前壁側の隅の石材は斜めに配置することで隅消しを指向している。

羨道の最下段の石材の詳細は不明だが、ピンポールを用いたところ、さらに下方に別の石材が存在することが確認できており、もう 1 段存在する可能性が高い。羨道には玄室で使用される長軸が 1 m を越えるような巨石は見られず、小ぶりの石材が用いられている。

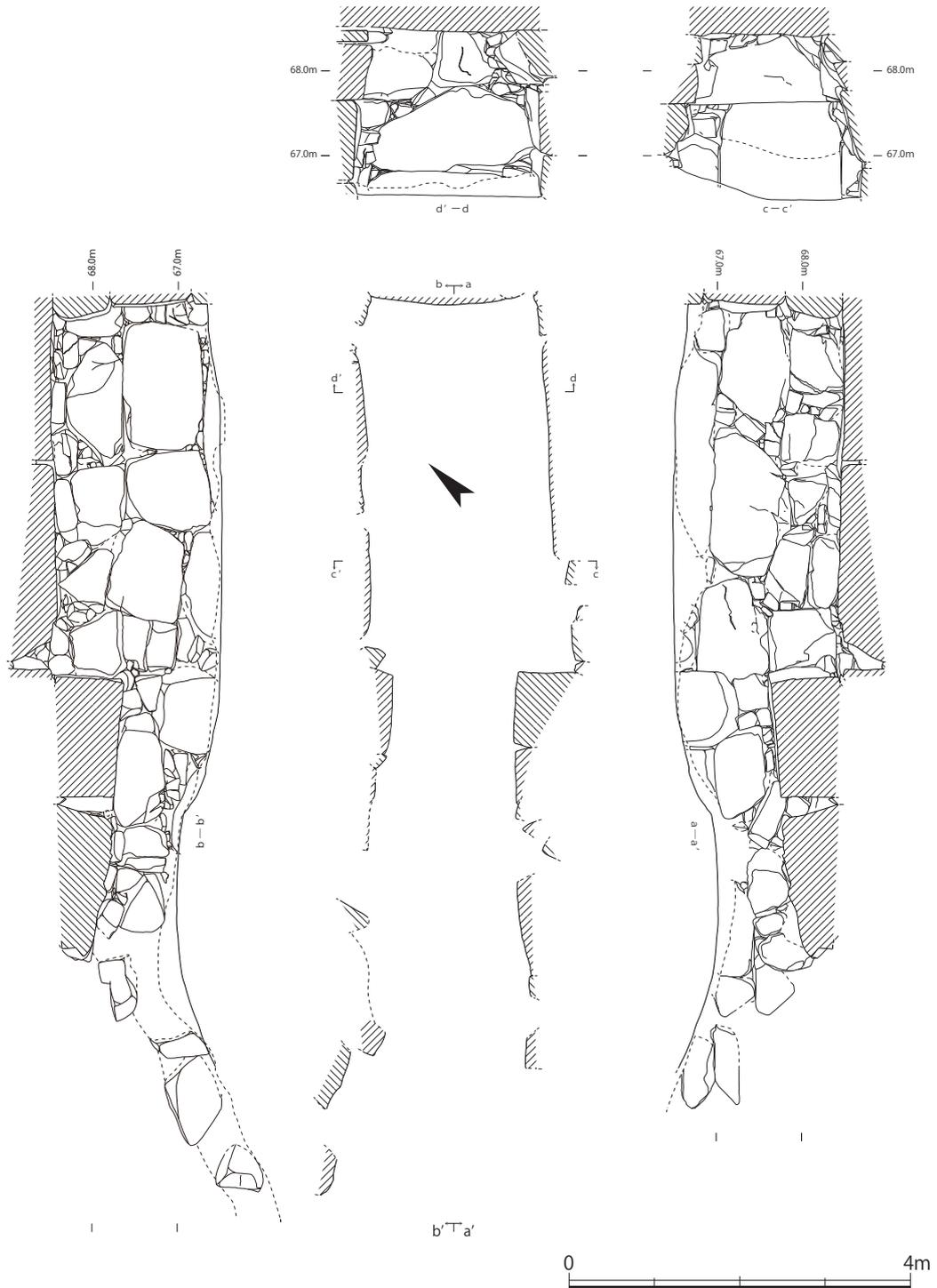


図3 須田平野古墳石室実測図 (S=1/80)

前庭は開口部に向かうにつれ石材の抜けが目立つが、右側壁先端より2つ目の石材までは左側壁とも対応し、築造時の架構位置に近いと考えられる。現状で、羨道と前庭を区切るような縦の目地は確認できない。

玄室、羨道ともに断面形態を見ると、側壁が内傾斜しており、持ち送り気味に積まれていることがわかる。とりわけ両側壁の第3単位に顕著にみられ、特に左側壁は傾斜が大きくなっている。

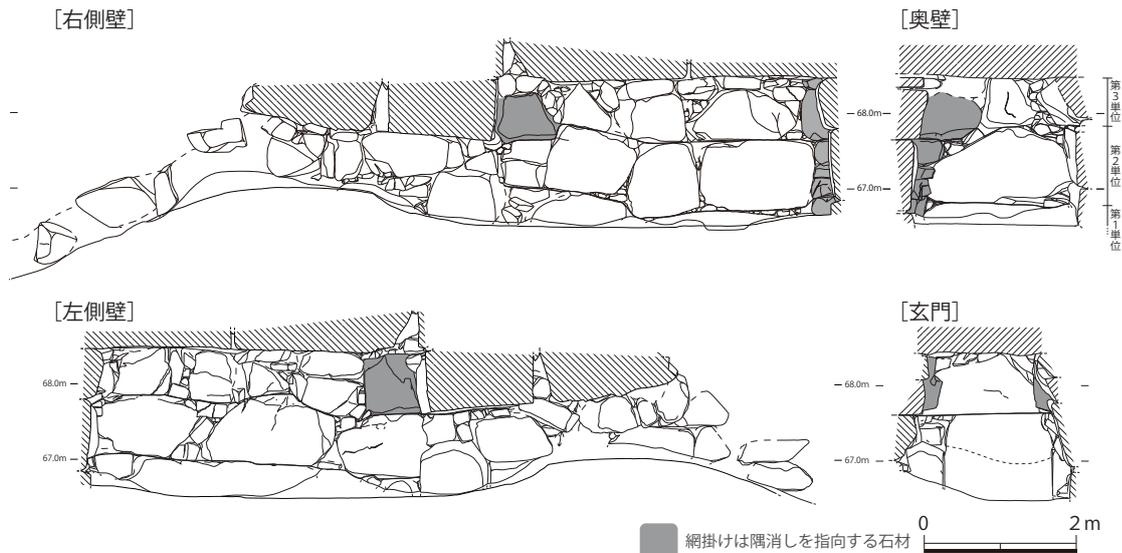


図4 須田平野古墳石室の目地 (S=1/100)

表2 須田平野古墳の構築単位

壁面	範囲	石材の使用傾向	単位
奥壁	L=～66.8m	長軸2.0m以上の石材を主に使用	第1単位
	L=66.8～67.8m	長軸1.9m以上の石材を主に使用	第2単位
	L=67.8m～天井	短軸0.6～0.7m、長軸0.8mの石材を主に使用	第3単位
左側壁	L=～67.0m	長軸2.0m以上の石材を1石使用	第1単位
	L=67.0～67.8m	長軸1.2～1.7m、短軸0.8～0.9mの石材を主に使用	第2単位
	L=67.8m～天井	長軸0.6～0.9m、短軸0.5～0.7mの石材を主に使用	第3単位
右側壁	L=～67.0m	長軸2.0m以上の石材を使用	第1単位
	L=67.0～67.6m	長軸0.9～1.5m、短軸0.9～1.0mの石材を主に使用	第2単位
	L=67.6m～天井	長軸0.7～1.5m、短軸0.6～0.9mの石材を主に使用	第3単位

以上のように玄室の壁面構成は、目地によって明確に変化するといえる。第1単位は長軸2.0mを越える巨大な石材を使用し、第2単位は長軸1.0m以上の大ぶりの石材を主として、隙間には小ぶりの石材を充填する。第3単位は長軸1.5mを越える大ぶりの石材も一部見られるが1.0m未満の石材を主とし、隙間を小さな石で充填する。このように石室の下部から上部に向かって積まれる石材の大きさは小さくなる。また、第3単位では、玄室の隅に斜めに石を据えることで隅消しする様子が見られる(図4)。

(4) 小結

以上を整理すると、須田平野古墳の石室は、南西方向に開口する横穴式石室で、玄室長は4.4m、幅2.0～2.5m、羨道長は3.2m、幅1.5～2.1m、前庭を含めた石室の全長は7.0mを越える。玄室の平面形は玄室長幅比2.2の長方形で、玄室と前庭の両幅がそれぞれ約0.5mずつ開口部側に開く構造をなす。石室石材には幅1.5m以上の大ぶりの石が多数用いられ、天井石にも2.0m近い巨石が用いられる。

玄室は各壁面で石積みの変化する水平のラインによって3単位に分けることが可能である。奥壁と左側壁の第1・2単位の隅の石材同士はかみ合っている一方で、奥壁と右側壁の第1・2単位の隅の石材同士はかみ合っておらず、右側壁では小さめの石材を縦に3石積むことで隙

間を充填し、やや隅消しを指向する。さらに、右側壁の第2単位の前壁付近では、比較的小さめの石材を用いて左側壁と長さを揃えているように看取でき、石室構築の際に左側壁に優位性があったと考えられる。以上のことから、奥壁、玄室左側壁、玄室右側壁の順に構築された可能性が高い。また、玄室の第2単位の日地が羨道にまで通っていることから、羨道構築の際に玄室の日地に揃えることを意識していたと考えられる。

羨道は奥壁からみて右側に偏ってとりつく。この形態は先行研究で「両袖式」「両袖傾向の左片袖式」「左片袖傾向の両袖式」など評価が分かれてきたが（本章第2節参照）、両玄門の構築方法が共通することからあくまで両袖式を指向したものと看取り、本稿では左片袖傾向の両袖式とする立場をとりたい。羨道の平面形態は前庭側へ向かってハの字状に開く。羨道天井石も開口方向に向かって開くような形態で、より外の空間を意識した構造と評価できる。

（井川瑞季）

4. 須田平野古墳石室の系譜

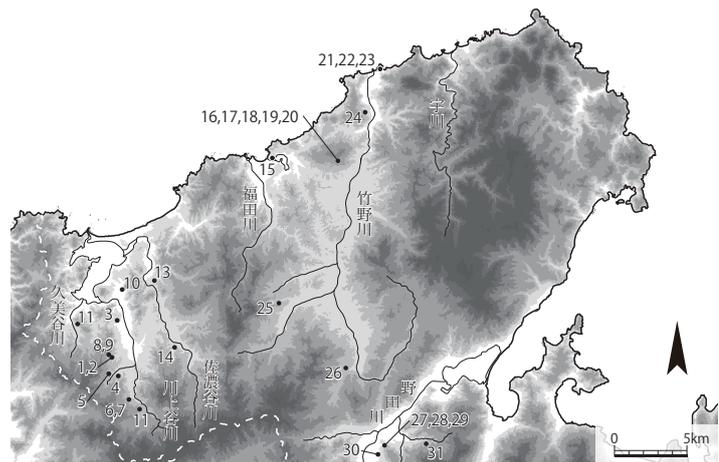
（1）須田平野古墳石室の位置づけと課題

須田平野古墳は伯耆谷に築かれた最初の横穴式石室墳であり、石室規模は谷の奥部に築造され豊富な副葬品をもつ湯舟坂2号墳に次ぐ。さらに、丹後地域で「最も畿内の石室に近似する」（梅本 2007：176）との評価も受ける畿内系両袖式横穴式石室⁽⁶⁾の古相の例の一つとして、畿内から石室を構築する工人集団が派遣された、あるいは技術伝播があったと想定されるなど（本章第2節参照）、畿内的な石室としての面が強調されてきた。また、石室の構造からTK43 型式期併行の年代が与えられている（細川 2000、山口 2014）。

確かに須田平野古墳の石室構造の特徴である奥壁に1段1石を指向する、巨石を使用するといった壁面構成、玄室長幅比2.2というプランは畿内系横穴式石室との関連性から説明することが可能であり（梅本 2007）、須田平野古墳を畿内との関係の中に位置づける根拠となってきた。一方でハの字状に開く羨道プランは丹後半島の横穴式石室にみられる特徴とされ（山口 2014）、須田平野古墳の石室は畿内の影響だけでなく様々な要素が合わさったものと推測される。本節では周辺の石室と平面プランや構造を比較しながら、須田平野古墳の石室の系譜について若干の考察をおこなう。

（2）川上谷川流域の中の須田平野古墳石室（図6、表3）

表3に内部構造が判明している川上谷川流域の主要な石室墳を示した。須田平野古墳の



1. 崩谷3号墳 2. 崩谷1号墳 3. 陵神社12号墳 4. 須田平野古墳 5. 湯舟坂2号墳
6. 畑大塚1号墳 7. 畑大塚2号墳 8. アバ田1号墳 9. アバ田2号墳 10. 塚の鳴古墳
11. 経塚古墳 12. 口馬地古墳 13. 川向1号墳 14. 下村岡古墳 15. 岡1号墳 16. 高山1号墳
17. 高山4号墳 18. 高山5号墳 19. 高山7号墳 20. 高山12号墳 21. 大成7号墳
22. 大成8号墳 23. 大成9号墳 24. 上野1号墳 25. 桃谷1号墳 26. 新1号墳
27. 入谷A1号墳 28. 入谷11号墳 29. 入谷14号墳 30. 河ノ辺古墳 31. 高浪1号墳

図5 丹後半島の主な横穴式石室分布図（S = 1/100000）

（ベースマップに国土地理院地図を使用）

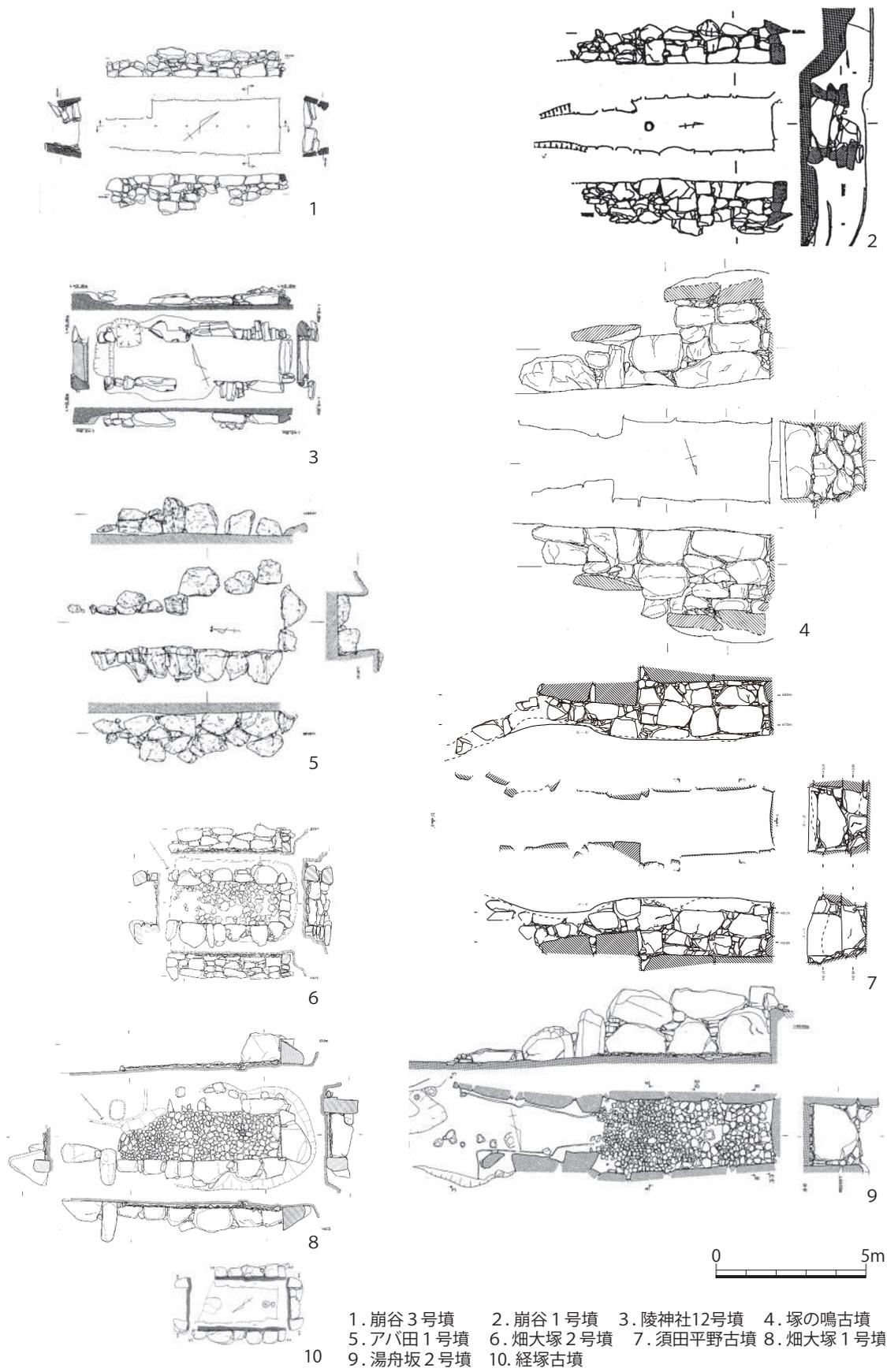


図6 川上谷川流域の主な横穴式石室 (S=1/200)

表 3 川上谷川流域の主な横穴式石室

古墳名	川上谷川	石室				羨道 ハ字	墳丘(m)	年代	備考	番号
		平面プラン	玄室長	玄室(奥壁)幅	玄室長幅比					
崩谷 3 号墳	中流域	右片袖	4.1	1.75	2.3	×	円(15~16)	TK10古		1
崩谷 1 号墳	中流域	右片袖	4.4	1.7	2.6	×	円(15)	TK10新		2
陵神社12号墳	下流域	(竪穴系横口)	—	1.48	—	×	円(19)	TK10新		3
須田平野古墳	中流域	両袖	4.4	2.0	2.2	○	円(17)	TK43	片袖傾向	4
湯舟坂 2 号墳	中流域	両袖	5.7	1.96	2.9	○	円(18)	TK43		5
畑大塚 2 号墳	上流域	—	3.76~	1.24	—	—	円(10)	TK43		7
アバ田 1 号墳	中流域	右片袖	3.14	2.28	1.37	×	円か	TK209		8
アバ田 2 号墳	中流域	右片袖	—	—	—	×	円か	TK209		9
畑大塚 1 号墳	上流域	両袖か	5.5	1.4	3.9	×	—	TK209か		6
塚の鳴古墳	下流域	両袖	4.8	2.6	1.8	○	—	TK209か		10
経塚古墳	上流域	—	5.1~	1.96	—	—	—	TK209		11

※1 数値は各報告書、宮元2001、田中2014を、年代は細川2001・2006、山口2014を参考にした。

※2 番号は図5に対応する。

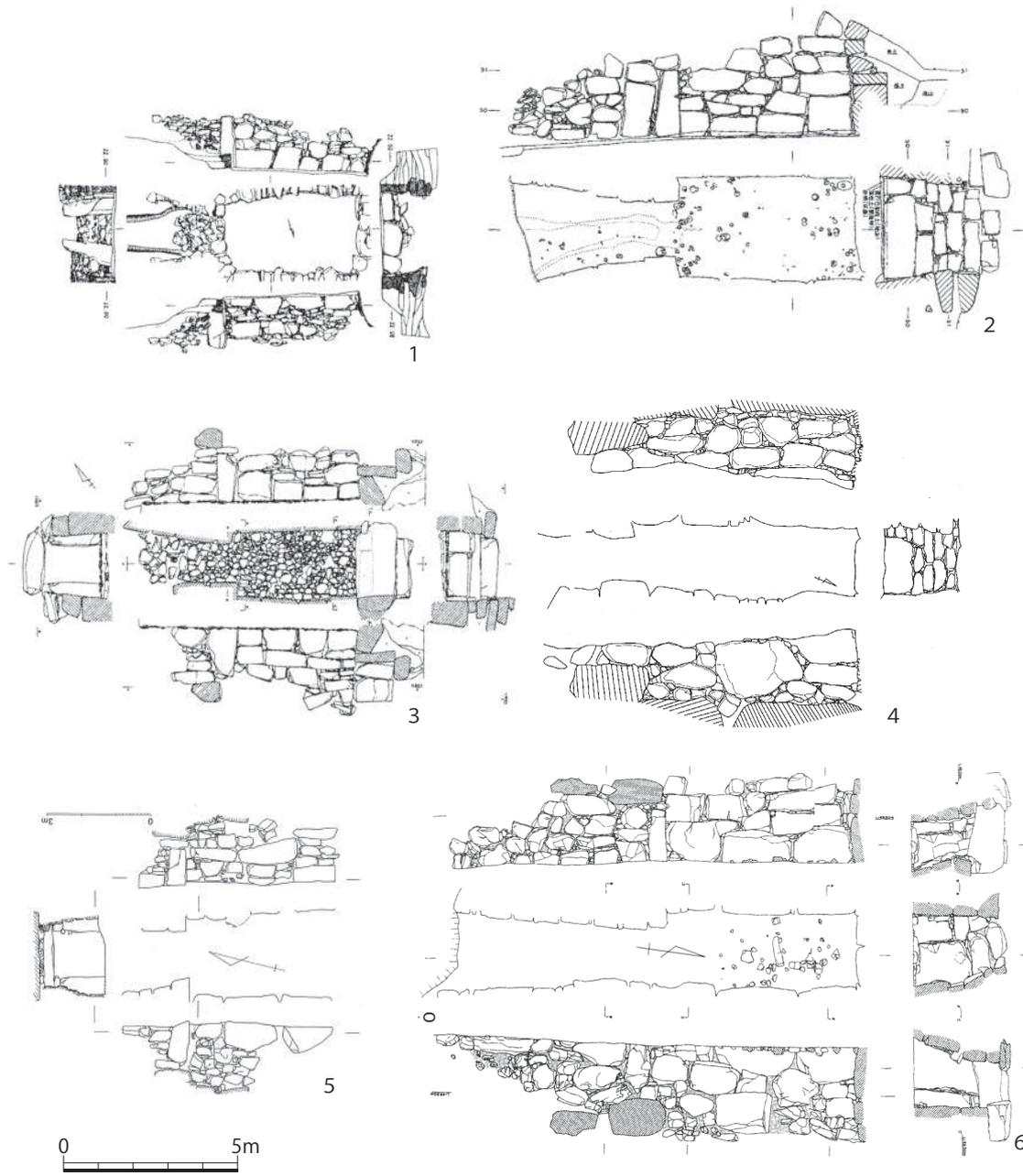
石室より古い横穴式石室として、川上谷川中流域に位置し TK10 型式期古段階に比定される右片袖式石室の崩谷 3 号墳（図 6 - 1）がある。川上谷川流域最初の畿内系横穴式石室だが、玄室長幅比 2.3 と玄室幅が狭い平面形は当該時期の畿内のものではなく、袖形態が畿内に由来するものであっても二次的な伝播を考える必要性が指摘されている（梅本 2007）。続いて TK10 型式期新段階には玄室長幅比 2.5 の右片袖式石室である崩谷 1 号墳（図 6 - 2）が築造されるが、いずれも羨道は開口部に向けてややすぼまる形態で、小ぶりの石材を小口積みにする。

竪穴系横口式石室とみられる陵神社 12 号墳（図 6 - 3）を除くと、須田平野古墳は後述する石室の構造と須田平野古墳以外の古墳から出土した須恵器からみて、川上谷川流域で現在構造の詳細が判明している両袖式横穴式石室墳 4 基の中で最も早く築造されたとみられる。須田平野古墳以外でハの字状の羨道が確認できるのは川上谷川中流域の湯舟坂 2 号墳（図 6 - 9）、久美浜湾に近い下流域の塚の鳴古墳（図 6 - 4）である。どちらも両袖式横穴式石室で、主に巨石を使用した畿内系横穴式石室といえる。

伯耆谷最奥に位置する湯舟坂 2 号墳は須田平野古墳と最も近い位置に築造され、石積みの方法がよく似ており、2 基は連続する首長墳であること、湯舟坂 2 号墳の石室築造にも畿内からの直接的な影響があった可能性が高いことが指摘されている（新納 1983、梅本 2007）。羨道の形状のみならず、湯舟坂 2 号墳では 2 段目以降の石積みの残存状況が悪く確認し難いが、玄室隅に斜めの石材を架けやや隅消しの体をなす点、奥壁側の玄室幅より羨道側の玄室幅が広がり、玄室の平面形が台形になる点は共通する。両古墳は玄室幅こそほぼ同じだが、湯舟坂 2 号墳の玄室長は 5.7 m で玄室長幅比は 2.9 と大きい。また、石材も大型化し玄門の 1 石化が進む点、側壁の段構成が減るとみられる点を畿内の横穴式石室の編年観（太田ほか 2007）に照らしあわせれば、湯舟坂 2 号墳が須田平野古墳より型的に後出すると認めてよい。

畑大塚 1 号墳（図 6 - 8）は遺構の一部を欠くため袖部の形状は不明だが奥壁 1 段目は 1 石で構成し、奥壁の石材より小ぶりの石で玄室長幅比 3.5 の長大な玄室を構成する（山内 1988）。石室の大部分を欠いており、須田平野古墳と比較することが難しいが、玄室長や玄門が立柱石からなる点は湯舟坂 2 号墳と共通する要素が指摘できる⁽⁷⁾。

塚の鳴古墳はかつて内海であった久美浜湾側に面した低丘陵上に単独で築造された古墳で、



1.入谷西A1号墳 2.大成8号墳 3.高浪1号墳 4.口馬地古墳 5.下村岡古墳 6.高山12号墳

図7 丹後半島の主な横穴式石室 (S=1/200)

5段構成の奥壁の1段目は大型の石材を配し1石で1段を構成している。2段目以降は小型の石材になり、側壁も上段は小型石材を充填する。玄門は立柱石を用い、ハの字に開く羨道をもつ (山口 2014)。

玄室長幅比は 1.8 で奥壁、側壁の構成ともに須田平野古墳との類似性はそれほど強くない。塚の鳴古墳の石材の積み方や玄室長幅比は後述する竹野川流域の大成8号墳 (図7- 2) や野田川流域の高浪1号墳 (図7- 3) に近いものである。

表 4 丹後半島の主な横穴式石室

古墳名	所在	水系	石室				羨道 ハ字	墳丘(m)	年代	備考	番号
			平面プラン	玄室長	玄室(奥壁)幅	玄室長幅比					
入谷西A1号墳	加悦町	野田川	(竪穴系横口)	3.89	2.26	1.7	○	円か	TK10		27
大成7号墳	丹後町	竹野川	右片袖	4.4	1.9	2.3	○	円(16)	TK10新		21
高浪1号墳	野田川町	野田川	両袖	4.6	2.0	2.3	○	円(10~12)	TK43	石棚	31
新戸1号墳	大宮町	竹野川	両袖	6.3	2.15	2.9	—	前方後円(35)	TK43	石棚	26
上野1号墳	丹後町	竹野川	右片袖	4.6	2.1	2.1	×	円(13)	TK43		24
高山1号墳	丹後町	徳良川	左片袖	4.7	2.0	2.6	×	円(13)	TK43		16
高山4号墳	丹後町	徳良川	右片袖	3.62	1.4	2.6	△	円(11)	TK43		17
高山5号墳	丹後町	徳良川	右片袖	3.7	1.4	2.6	×	円(12)	TK43		18
川向1号墳	久美浜町	佐濃谷川	右片袖	4.35	1.58	2.6	×	円(16)	TK43		13
口馬地古墳	久美浜町	久美谷川	両袖	6.4	1.9	3.4	—	円(16)	TK43~	片袖傾向	12
河ノ辺古墳	加悦町	野田川	右片袖	4.4	2.2	2.0	○	円(12.5)	TK209		30
入谷14号墳	加悦町	野田川	右片袖	3.9	1.4	2.8	×	円(12)	TK209	天井中高式	29
入谷11号墳	加悦町	野田川	右片袖	4.8	1.5	3.2	×	円(12)	TK209	天井中高式	28
桃谷1号墳	峰山町	竹野川	両袖	5.0	2.1	2.4	×	円	TK209		25
大成8号墳	丹後町	竹野川	両袖	4.5	2.5	1.8	○	円か	TK209		22
高山12号墳	丹後町	徳良川	右片袖	5.7	2.1	2.5	○	円(18)	TK209		20
下村岡古墳	久美浜町	佐濃谷川	両袖	4.1~	2.2~	—	△	円(13~15)	TK209~		14
岡1号墳	網野町	樋越川	無袖	6.6	2.3	2.9	×	円か	TK209		15
大成9号墳	丹後町	竹野川	無袖	5.9	1.6	3.7	×	円か	7世紀前半		23
高山7号墳	丹後町	徳良川	無袖	全4.2	1.32	3.2	×	円(8)	7世紀前半		19
金屋上司古墳	加悦町	野田川	無袖	全7.9	2.1	3.8	×	方(12×13)	飛鳥!		—

※1 数値は各報告書、宮元2001、田中2014を、年代は細川2001・2006、山口2014を参考にした。

※2 番号は図5に対応する。

崩谷3号墳の玄室長幅比は須田平野古墳とほぼ一致しているものの、石室構築の方法上は須田平野古墳に何らかの影響を与えたとは考え難い。須田平野古墳の石材の大きさ、配置は前段階までの石室の様子とは一線を画しており、さらにその技法が直接的に継承されるのは湯舟坂2号墳のみといえる。

(3) 丹後半島の中の須田平野古墳石室（図7、表4）

細川康晴氏によると、丹後半島の導入期の横穴式石室は「北部九州系横穴式石室」「畿内型横穴式石室」「竪穴系横口式石室」に分類される（細川2001）。羨道がハの字状を呈する畿内系横穴式石室は、竹野川流域河口部のTK10型式期新段階の右片袖式横穴式石室である大成7号墳でいち早くみられ、やや時期を下ると、丹後における両袖式の畿内系横穴式石室の初現ともいわれる野田川流域河口部に位置する高浪1号墳（図7-3）、やや時期の降る竹野川河口部の大成8号墳（図7-2）にも確認できる。これら2古墳はハの字状に開く羨道の形状を持ち、石材の積み方、玄門での立柱石の使用などに強い類似性が指摘されており（森1991）、前項で述べた塚の鳴古墳も玄室長幅比と羨道の形状などが類似することからこのグループに分類される（山口2014）。塚の鳴古墳は須田平野古墳と築造時期が併行し、石室の平面形態では両袖式+ハの字状の羨道、石材の用い方では奥壁を大型の石材で構成し側壁との境に小ぶりな石材を縦に積むという点は共通するが、羨道が玄室の片方に寄ってとりつく片袖傾向をみせる点や石材のサイズ・積み方は大きく異なる。

ハの字状の羨道形態については山口誠司氏が検討をおこなっており、竪穴系横口式石室である野田川上流域の入谷西A1号墳（図7-1）で前庭側壁がハの字状に開いており、何らかの関係を想定しているほか、丹後半島ではこの形状の羨道部を共通項とする石室構築が流域を越えて広く各地にみられ、これらの地域間で技術伝播があったか、あるいは同一の工人集団に

よる石室構築を想定している⁽⁸⁾。また、片袖傾向の両袖式石室についても北部九州系石室と畿内系石室の影響を受けた入谷西 A 1 号墳を類例とし、須田平野古墳のほか久美谷川流域の口馬地古墳にもみられることから、これらの地域の同一工人集団の関与を想定する。このことから古墳時代後期中葉から後期後半にかけての丹後地域ではハの字状の羨道部を構築する系統と片袖傾向の両袖式石室を構築する系統の2つの技術系統があると想定したが(山口 2014)、須田平野古墳がその両方の特徴を持つ以上、ハの字状の羨道は野田川上流域、竹野川河口部、川上谷川、久美谷川で大型石室を構築した集団が共有していた情報で、それに派生する形で川上谷川、久美谷川流域の集団に片袖傾向の平面プランをもつ技術系統があったと考えられる。

この集団が単系統の工人集団か否かにはさらに検討が必要であるが、ハの字に開く羨道という共通項が丹後地域の特定流域で盛行する様子からは、構築技術に起因する形態というより、埋葬行為に際しての空間利用の共通性と捉えることも可能だろう。この特殊な羨道の形態はすべての大型横穴式石室に取り入れられているわけではなく、川上谷川流域でも継続して採用されているとはいえないが、丹後半島の横穴式石室導入期(TK10 型式期新段階～TK43 型式期)に各地で築かれるという点には地域性ともいえる一種の連帯を見出せる。これら共通の要素をもつ石室の中で、須田平野古墳は石材の用法や玄室長幅比により直接的な畿内の影響が表れているといえる。さらに、後続する湯舟坂 2 号墳は台形を呈する平面形態や羨道の形状に須田平野古墳との共通点を持ちながら側壁の上段に巨石を使用する同時期の畿内の石室と共通点の多い古墳で、改めて畿内の技術の導入がはかられたとみられている(梅本 2007)。このように伯耆谷の首長墓は羨道の形態や湯舟坂 2 号墳にみられる玄室の長大化など、埋葬行為をおこなう空間は丹後の要素を維持しながら、石室の構築技術には常に畿内の新形式を取り入れているといえよう。(守田悠)

5. おわりに

須田平野古墳の測量調査について、昨年度の墳丘の報告に次いで今回は石室の報告をまとめた。昨夏に実施した発掘調査の成果も踏まえると、南西に開口する残存長 7.6 m、玄室長 4.4 m、玄室最大幅 2.5 m、羨道最大幅 2.1 m の横穴式石室を内包する直径 17 m の円墳であることが明らかになった。羨道部については、残っている天井石から 3.2 m の数値を得る。この場合、全長は 7.6 m ということになる。ただし、羨門の位置についてはさらに検討が必要であり、羨道の天井石がさらに 1 石あるか否かを含め、今後の発掘調査によって閉塞位置や、羨門部分の側壁の状況を確認する必要がある。

石室の形状や石材の用い方などに湯舟坂 2 号墳との共通性が見られる一方で、石材の大型化やそれに伴う側壁の段構成の減少といった変化がうかがえ、時期的には須田平野古墳がやや先行することが導き出された。湯舟坂 2 号墳が天井石を失っているため、玄室前壁高といった重要な要素の比較ができない点が残念であるが、須田平野古墳では 1 石ながら 1 m 近い前壁高があり、TK43 型式期の石室という評価も首肯される。

湯舟坂 2 号墳や須田平野古墳といった大型横穴式石室が近接して立地している伯耆谷には、多くの古墳が分布しており、暮石古墳群や九十九塚古墳群など横穴式石室を主体とする古墳も数多く立地している。こうした群集墳からやや独立する形で大型横穴式石室を内包する古墳が

位置しており、古墳時代後期の階層構造を考える上で示唆的である。また、横穴式石室をもつ古墳は、この伯耆谷の一つ北にある新庄区の谷にもあるほか、川上谷川の上流部にも点在しており、集中する地域の一つとあってよい。川上谷川流域で古墳時代後期に開発が進んだことを示すとともに、古代熊野郡の中の中心域が形成されていると評価することができよう。当時の交通路などの検討を進め、この地域がもつ歴史的な特質についてもさらに検討を進めていくことが必要である。

今回の調査にあたっては、地元須田区をはじめ、多くの方々にご支援、ご協力を賜った。以下に明記するとともに、改めて謝意を表したい。（菱田哲郎）

謝辞

本稿の作成にあたり、岡田大雄氏、小滝篤夫氏には多大なご協力を賜った。末筆ながら記して感謝申し上げる。なお、本稿は令和 4 年度 京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）「過疎化が進む地域における文化遺産の地域資源化に向けての実践的研究—京丹後市久美浜町須田区からの発信—」、および日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B））「古墳・副葬品の多角的検討にもとづく日本列島初期仏教受容史の再構築」（22H00719）の成果の一部である。

註

- (1) 「壁体下半部は垂直、その上部は直線的に内傾させて積む」壁体構造を指す（宮元 2005）。
- (2) 玄室長幅比は玄室長÷玄室幅で求め、本稿では小数第 2 位を四捨五入する。
- (3) 京丹後市史編さん委員会 2010 の石室規模の数値や石室形態の評価は奥村 1983 と一致しており、同書を引用したとみられる。
- (4) 現地にて小滝篤夫氏（京都府立大学生命環境学部森林科学科非常勤講師）よりご教示を得た。
- (5) 石材の大きさで用いる長軸・短軸は、見た目によるものである。
- (6) 既往の横穴式石室研究においては畿内とその周辺の横穴式石室の系統をあらわす表現として「畿内型」、「畿内系」などの語句が用いられてきた。先行研究で畿内との関わりを強調されてきた須田平野古墳も個々の研究者の文脈によって様々に称されてきたが、本稿では畿内地域に分布する畿内型石室の影響を受けて地方で発生した横穴式石室を畿内系横穴式石室と呼ぶ立場に立ち（太田 2022）、須田平野古墳を畿内系横穴式石室と捉える。
- (7) 築造時期は湯舟坂 2 号墳と同じかやや下る TK209 型式期とされる。敷石をもち、奥壁から羨道部へいくにつれ敷石が小ぶりになる点、奥壁よりの玄室中軸上に敷石が円形に陥没する遺構をもつ点も湯舟坂 2 号墳と共通することが指摘されている（山内 1988）。この円形の陥没坑については経塚古墳でも玄室に同様の小土坑がみられるがいずれも遺物の出土はなく、その性格は不明である。
- (8) ただし、高浪 1 号墳は石柵をもつという独自性も有し、ハの字状の羨道をもつ古墳同士の関係について検討の余地があるとしている。また、湯舟坂 2 号墳はそれらと奥壁構成や側壁の用材が明らかに異なる様相を示すことも指摘している（山口 2014）。

参考文献

梅原末治 1920 「川上村古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊 京都府教育委員会

- 梅本康広 2007 「丹後の横穴式石室」『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局
- 太田宏明・森下章司・森本 徹 2007 「近畿の横穴式石室をめぐる諸問題」『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局
- 太田宏明 2022 「畿内系石室」『横穴式石室からみた古墳時代社会』（季刊考古学 160）雄山閣
- 奥村清一郎 1983 「1. 位置と環境（3） 歴史的環境」『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会
- 春日字光 2014 「川上谷川流域を中心とする地理的・歴史的環境」『同志社考古』第13号 同志社大学考古学研究会
- 京丹後市教育委員会・京都府立大学文学部考古学研究室 2023 「須田平野古墳 2023 年度の発掘調査の成果」（現地説明会資料）
- 京丹後市史編さん委員会編 2010 「第5章 / 佐濃谷川、川上谷流域とその周辺の考古資料」『京丹後市の考古資料』京丹後市役所
- 京都府熊野郡役所 1923 『京都府熊野郡誌』
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2023 「京丹後市須田平野古墳の調査（1）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第9号 京都府立大学文学部歴史学科
- 久美浜町史編纂委員会編 2004 「考古」『久美浜町史 資料編』久美浜町教育委員会
- 田中彩太 2014 「京都府佐濃谷川流域の遺跡再考—久美浜町における古墳の動向—」『同志社考古』第13号 同志社大学考古学研究会
- 辻川哲朗 2003 「同志社大学考古学研究会活動年表」『同志社考古』第11号 同志社大学考古学研究会
- 新納 泉 1983 「（5）墳丘と石室」『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会
- 細川康晴 1996 「丹後の導入期の横穴式石室」『京都府埋蔵文化財論集』第2集 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 細川康晴 2000 「横穴式石室の導入と展開」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』（季刊考古学別冊10）雄山閣株式会社
- 細川康晴 2001 「丹後地域における畿内型横穴式石室の系譜」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 細川康晴 2006 「古墳時代後期の丹後」『京都府埋蔵文化財論集』第5集 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 宮元香織 2001 「丹後の横穴式石室」『金屋上司古墳発掘調査報告書』（奈良女子大学考古学研究報告2）奈良女子大学文学部古代文化地域学講座
- 宮元香織 2005 「『畿内型』横穴式石室について—その成立と展開—」『横穴式石室からみた濃尾の地域社会』（勢濃尾研究会第4年次会資料集）
- 森 正 1991 「丹後の横穴式石室」『京都府埋蔵文化財論集』第2集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 山内陽詳 1988 『畑大塚古墳群』（京都府久美浜町文化財調査報告第10集）久美浜町教育委員会
- 山口誠司 2014 「久美浜町の横穴式石室について」『同志社考古』第13号 同志社大学考古学研究会

図版出典

図1・5：国土地理院地図に筆者加筆

表1～4、図2～4：各筆者作成

図6～7：石室実測図は各報告書より引用

編集後記

フィールド集報の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの考古・建築・地理・文化情報の合同実習メニューとして学生が Adobe 社の InDesign を利用しておこなっている。

今年度は、3年ぶりに多様な場所・フィールドで調査をおこなうことができた。調査時だけでなくその後の作業においても多くの方々からご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。

海外の調査も徐々にではあるが再開されるようになった。来年度はまた違うところに行きたいと思う今日この頃である。(き)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第10号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2024年3月30日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
